
うらぼんえ

カイリ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

うらぼんえ

【NZコード】

N4885A

【作者名】

カイリ

【あらすじ】

盂蘭盆会の日、死んだはずの弟が現れた。弟（炯人）と僕（瑠仁）は犬猿の仲。そんな炯人は僕を誘つて写真をとる。僕は、炯人が死んだ日のことに思いをはせる。そして出来上がった写真を目に見て、炯人の本心を知った。また僕も、自分の本当の気持ちに気付く。僕は、今はもういい炯人と漸く仲良くできる様な気がした。

(前書き)

このお話を血の繋がらない、犬猿の仲の兄弟の心のすれ違いを描いたものです。作者はまだまだ未熟ですので読みにくさを感じられる点もあるとは思いますが、ご了承ください。

この国には盂蘭盆会^{うらぼんえ}と呼ばれる仏事がある。食べ物などを仏壇に供えて、死者の冥福を祈るものだ。盂蘭盆会には死者が還つてくれるという……。

今年の夏は暑い。気温も高いが湿度も高く、そのくせ空梅雨で水不足の危惧すらもされる夏だという。ニュースでは地球温暖化が原因になっているといっていた。

去年の夏も暑かつたが、今年はもっと暑い。そう言えば、彼は去年の猛暑の中でもケロリとしていたつけ。

彼は夏が好きだった。だから僕は、夏が嫌いだった。彼と同じ気持ちになり、同じ思いを共有するのが嫌だったのだ。……泣いてなどやるものか。あの時、そう思つた。そしてそれは今でも変わつていない。

久しぶりに帰つてきた自分の部屋。誰もいない筈のそこから、物音がした。僕は、護身用のサバイバルナイフを取り出した。小さいがなかなかよく切れる。あの日を境に、僕の身を守つてくれている「相棒」だ。

ドアを開け放ちながら、それを構える。部屋に人の姿はない。それでも威嚇しながら足を踏み込む……と。

「相変わらず、物騒なやつ」

背後から声がした。……それも、彼の声が。

「中学生がサバイバルナイフなんか持ち歩くか、普通？」

硬直する体をぎこちなく動かして、振り返り、そして……。

「炯人……？」

まさか、と思う。彼がここにいるはずがない。暑さで頭がおかしくなつてしまつたのだろうか。

「やあ、瑠仁^{るひと}。まだしぶとく生きてたのネ」

炯人は皮肉を込めた声で笑つた。

「何だよ、その顔。せっかく化けてきてやつたのに「頼んでない」

僕は、体の力が抜けしていくのを感じた。ああ、間違いない。炯人だ。二ヶ月前に死んだ、僕の義弟。

「まあ俺だつて好きで来たわけじゃないけど

炯人は言いながらベッドに腰かけた。そして嘲笑を浮かべて僕を見る。

「お前を呪い殺すつてのもいいけどな。それはまた今度で。……今日は少し話そうぜ」

「おれは君と話すことなんかないけど」

彼に鋭い視線を投げ掛けて椅子に座つた。

「つれないねえ。……まあつれても困るけどな

炯人は苦笑したかと思うと肩をすくめ、真顔になつた。

「なんで俺が殺されなきゃなんなかつたんだ」

炯人は怒りと苦痛とが入り混じつたような声で問う。彼は、今年の6月に中学生ばかりを狙う殺人鬼によって命を絶たれていた。

「知らない。……無差別だつたんだろ？ 理由なんかないんじやないか

僕は淡々と答えた。

「……あの殺人犯、お前の知り合いなんだろ？ そんな感じのこと言つてたぜ」

「相手が一方的にね。おれは君が殺されたあとに初めて彼の顔を知つた」

僕が言うと、炯人はそれ以上は追及しなかつた。

いかにも無念そうな表情をする炯人の横顔を見ながら、僕はある男の姿を思い出していた。

黒い革のジャケット。黒いジーンズ。黒いサングラス。唯一、跳ねた赤い髪だけが色を持つていたという印象がある。

その男は、男子中学生連続殺人事件の犯人。炯人を殺した男だ。

僕は僅かに目を伏せる。炯人に事実を話す気はなかつた。僕は弟の死を悼む心すら凍えてしまつてゐるらしい。あの時も、そして

今も、炯人の死に悲しむことはない。それでも、なぜなのだろう。この途方もない息苦しさは。一体これは、何なのだろう。

「……確かに、君よりおれが死んだ方が良かつたのかもね」

僕が言うと、炯人は怪訝な顔をした。

「何言つてるんだ?」

「君の葬儀にはかなりの人が参列した。みんな、泣いていたよ」

僕の言葉に、彼は目を伏せた。

「俺のために泣くやつがいたのか」

「君の表の顔は、実にいいやつだつたからね」

言い、僕は嘲笑してみせた。

「でも、譲らないよ、この命は」

炯人は小さな子どものような表情をしてこちらを見た。

「瑠仁も、泣いたのか?」

「……そんなはずないじやん。うぬぼれないでくれる?」

僕は冷たくそれを一蹴する。

炯人はカラカラと笑い、立ち上がる。

「まあいいさ。ちょっと付き合え」

*

炯人は僕を伴い、隣町の写真館へやつてきた。僕らが小さい頃世話になつたご主人は、炯人が死んだことを知らない。笑顔で僕達を迎えてくれた。

「大きくなつたねえ、瑠仁君、炯人君。今日は? どんな写真をご所望だい?」

「俺がアメリカにホームステイに行くことになつたんで、そこの人達に瑠仁も紹介してやろうと思つて」

炯人は言う。

「私服なんんですけど、構いませんよね？」

主人はにこにこと笑みを称えた顔を頷けた。

「もちろん。すごいねえ、ホームステイなんかするのかい？」

すこいねえ、ホーマス元なんかするのかい？」

不本意ながら、火の隣に立つ。作三の言葉不思議。

「まあね。本当は、天国へホームステイをするのです」

彼は軽口を叩いた。

一 はい、撮るが

ご主人がカメラを構えて言う。炳人とツーショットの写真なんて、二度と撮ることはないと思っていたのに。

（…………ああ、今日は盂蘭盆だつたつけ）

彼が死んで一回目の盈虧益
だから
こんなに不思議な状況は
僕は立たされているのだろうか。

「瑠仁。おーい」

炯人の声にはつと我に帰る。

「このままで直立しないわけ？」

「別に」

「俺、少しご主人と話してくるわ」

懶然と答えた僕に、炯人は言い、微笑んだ。

111

僕は呼び止めかけて、口を閉ざした。あれほど嫌っていたのに、なぜ呼び止める必要があるんだ。そう自分に言い聞かせて、僕は口元を歪めた。

「ご勝手に」

僕の言葉に、炯人は屈託なく笑つて部屋を出ていく。…………まるで、あの日　　彼が死んだ日　　の、朝のように。

*

黒い革のジャケット。黒いジーンズ。黒いサングラス。そして目が覚めるように鮮やかな赤い髪。

僕は、あの男の名前を知らない。なぜ僕のことを狙っていたのかも知らない。あの男のことで知っていることといえば、僕は僕にとって、叔父にあたる人物だと言つこと。僕は戸籍上、桜庭家の長男、炯人とは一卵性双生児と言うことになつてゐる。けれど本当は僕は桜庭家の人間ではない。そのことにはずいぶん昔から気付いていた。

実の両親には会つたことがない。だから、叔父に会えると知つた時は、とても嬉しかつた。だのに。

僕の前に現れた叔父は、刃の長いナイフを持つていて。それを染めている血は義弟のもので。笑顔でそれを僕に振りかぶつてきた。何とか僕は殺されずに済んだけれども、代わりに炯人の死という事実をつけられた。

炯人が死んだと聞いたとき、正直何も感じなかつた。悲しさなどはもちろんなく、彼が死んだことで僕へのいじめがなくなるから嬉しい、とそんな気持ちすらなかつた。ただ、強いて言えば、驚いた。彼が死んだという事実ではなくて、彼の最期の言葉に。彼は腹部からの出血によつてできた血の海の中でひとつこと、たつたひとこと呟いたといつ。

「るう、助けて」

と。るう、というのは僕のことだ。幼い頃彼は僕をるうくんとか、るうと呼んでいた。

なぜ僕なのか。いつでも見方だつた両親でも、仲のよかつた友達でもなくて。なぜ僕なのか。友達とつるんで僕をいじめの対象にしていた君なのに？ 誰よりも何よりも君を嫌いぬいていた僕なのに？

それだけが、分からぬ。

「主人が入ってきた。出来上がつたらしい写真を手にして。炯人の姿はない。」

「おかしいんだよねえ」

「ご主人は咳きながら僕に写真を手渡す。」

「炯人君が、なぜか薄くしか写らないんだよ」

僕は写真に目を落とした。写真の中の炯人は笑っていたが、背景が見える程体が透けていた。

「不思議ですね」

僕は言い、灼熱の太陽の下へ出た。彼は、もういったのだろうか。

写真の中の彼がまぶたの裏から離れない。彼は、この上なく幸せそうな顔をして片手を僕の肩に乗せていた。

……ああこれが君の、本当の気持ちなの？

僕は静かに目を閉じた。僕を裏切り、傷付け、苦しませたのは感情の裏返しで。本当は、仲良くしたかったとでも言うの？

本当は、あの約束のままの気持ちだったと言つの？

だから最期に、僕を求めたと言うの？

僕は拳を握り締めた。

冗談じやない。そんな都合のいい話つて、あるものか。態度で示してくれなくては気付かないこともある。言葉で言つてくれなくては分からぬこともある。少なくとも僕は、君の心の中が分からなかつた。

君の本心を知つていれば、僕はあの口も、そしてさつきも、君を止められたかもしない。なのに。

君の本心を知つていれば、あの時君の声を聞いてすぐに駆け付けられたかもしない。なのに。

「けいくん、君は本当に、馬鹿だよ」

本当は、君の死を聞いて悲しかつた。還つてくれて、嬉し

かつた。……でも、何も感じられなかつた。あア、僕も大概馬鹿だ。けれど。それならば、今日、今この時から感じればいい。覚えていればいい。

ねえけいくん、来年の盂蘭盆も來ても構わないよ。そしたら、またやり直そう。今度は、お互い本心でさ。

代わりに僕は、君のために泣くから。

たつた一度だけ。

「るう君のこと、ずっとずっと大好きだよ」
と約束してくれた君との、懐かしい日々を想つて。

(後書き)

最後まで読んでいただき、ありがとうございます。本編の中ではさほど仲は悪くなさそうな一人ですが、本当は、もっともっと険悪です（笑）。今回は炳人は死んでいるし、瑠仁の方にも多少の負い目があると言つことで穏やかなのですが、もう少し険悪さを表現できればと反省しております。これからもっと精進してまいります。また懲りずに投稿させていただくと思いますので、そんな時はどうか読んでやってください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4885a/>

うらぼんえ

2010年10月12日13時45分発行